

[翻訳]

## H. H. フーベン『ゲーテのエッカーマン ― ある控え目な人間の伝記』(7)

林 久 博

### 25. いまだゲーテに尽くして

ゲーテはエッカーマンを離さなかった。「最終校訂版」を出すことで自身のライフワークが完成するように思われたが、その完成には10年もの歳月がかかった。というのも、この著作集は著者と出版者が予想していたよりもずっと時間をかけて販売されたからである。発行部数がどれほど多くても「実際の販売数として」二万という数字には「おそらく達することはないだろう」<sup>(1)</sup>とゲーテ自身も遺書の中で述べている。だがゲーテは未来に対する自分の影響力を過小評価していた。

ゲーテが息絶えた時、エッカーマンは死にゆくファウストの最期の言葉を引用して、隣室に集まっていた友人達を慰めた。それは彼らがまだ知らなかった「私のこの世での痕跡は未来永劫滅びることはないだろう！」<sup>(2)</sup>という言葉だった。この予言は的中した。ゲーテの死はヨーロッパ中の文化界の関心事となったのだ。ゲーテの人生全てが引き合いに出され、それがどれほどの高みにあるかを知って人々は驚愕した。ドイツはまだ小さな国家の寄せ集めにすぎなかったが、そのドイツがようやく予感し始めたのは、ゲーテという存在が国家間の精神的な競争においてどれほど重要な要因となりうるかということだった。1830年の7月革命以来、ドイツの新聞数は何倍にも膨れ上がっていた。出版業界の興隆は、彼らが軽蔑するゲーテに有利に働いた。ゲーテに関する著作物が書かれ始め、それが増えていったのだ。ゲーテの人生や作品が国民的な描写の対象となり、やがては学術の研究対象にもなっていった。もちろん、こんにち「文献学的な精密さ」と呼ばれているものからはまだまだ程遠かったが、文献が数多く残されれば未来へのバトンタッチは確実になされていくものである。数え切れない程の文章が次々と生み出されて、しばしば奇妙な円を描いたが、その中心にあったのはいつもゲーテという名前だった。辛い仕事をしたこともあって「最終校訂版」の売り上げはよかった。そこでゲーテ自身も予期していなかったことが起こり始めた。「最終校訂版」がまもなく品切れとなったのだ。そこで新しい版をどうするかという問題が浮上してきた。

「最終校訂版」は全ての著作物を収録していなかったために、ほとんど満足のいくものではなかった。全15巻の遺稿集もこうした不足を補うものではなかった。新しいゲーテ関連本が続々と出版されているということは、そもそも欠落があることを示していた。エッカーマンの『対話』でさえ、ゲーテ著作集に収録されていないものをあれこれ挙げていた。つまり追加すべきものがあちこちにあったのだ。おまけに全集全体に渡って誤植や印刷ミスだらけだった。ゲーテ自身校正にはいい加減だったし、リーマーも頼りにならなかった。エッカーマンにしても印刷ミスを見つけ出すことに喜びを見出すタイプではなく、そういった仕事は、例えば図書館書記ムスクルスに任せていた。ムスクルスは

1835年、ゲーテ著作集に人名索引と事項索引を付けた人物で、校正のような細かい仕事をエッカーマンから喜んで引き受けていた。「最終校訂版」は全55巻なので装丁費用も高くなりすぎてしまったが、依然として重要だったのは、新しいものを出版して不正な海賊版との競争に勝つことだった。だから1836/37年には4巻本の「国民ゲーテ」を出版した。その二年後には全集を刷新するのが避けて通れなくなっていた。編集者として候補に挙がったのは、またしてもエッカーマンただ一人だった。

この仕事は1839年の夏に始まった。今回特に面倒だったのは、たった32巻の中に全ての素材をどのように割り振っていくかだった。というのも、第1巻から第24巻までは、新しい国民ゲーテとして売り出すために詩や散文を扱うことにしていたからである。第25巻から第32巻までは学者や批評家といった専門家に向けられていた。同じような境界線はゲーテの叙情詩にも引かれることになっていた。つまり、大衆向きなものは全部第1巻と第2巻に収録し、分冊での購入を可能とした。また、個々の作品は年代的に成立順に並べなくてはならず、さらにどの巻もできるだけ同じ厚さでなければならなかった。「最終校訂版」の顧客にも埋め合わせしなければならなかった。あの時彼らには完全なゲーテを約束していたのだから、激しい抗議を受けてもおかしくなかったからである。今回新しく付け加わったものは特別に5巻本の別巻にして、彼らのために提供しなければならなかった。結局、この全集を全40巻にすることで話がまとまったが、エッカーマンは原稿の割り振り計画を少なくとも四つ持っていた。このような専門的な問題以上に厄介だったのは出版者との契約だった。四つ折り版「国民ゲーテ」は相続人と出版者双方にとってリスクを伴う取引だった。ゲーテの遺産相続人は一冊販売されるごとに1ターラー（店頭価格の6%）を受け取っていたが、1837年時点で6000冊の発行部数のうち700冊にまで数を減らしていた。相続人はお金が必要だったし、多額の前払いを当てにしていた。だがコッタは前払いに反対した。遺言執行者であるミュラーに対してエッカーマンは、相続人にも事情があると言って彼らを擁護し、専門的な意見書と手紙を数多く認め<sup>した</sup>た。そこには驚くべき職務上の器用さが表れていたし、かつての自分の人生の崇拜対象であったゲーテの遺族を擁護するという、ほとんど情熱的とも言える言葉が綴られていた。ミュラー長官はコッタと契約するつもりだったが、一方でエッカーマンは競合相手としてブロックハウスを引き合いに出した。するとこの計画は異なった様相を呈していった。突然コッタが六万ターラーの固定報酬を支払う準備があると言ってきたのだ。ブロックハウスが七万ターラーを提示すると、コッタはさらに報酬を八万ターラーに釣り上げて、12年間の新版出版権を獲得することとなった。相続人はゆっくりと滲み出してくる売上報奨金の代わりに、今や莫大な財産を現金で支払ってもらえた。その功績はエッカーマンにあると言える。

仲介にも成功し編集者としても仕事をこなしたのだから、自分に相応しい埋め合わせについて何も言わなくても話題になるだろう、彼は密かにそう考えていた。だが自分がひどく裏切られているのが分かった。彼は軽率にも前もって自分の条件を言っていなかったのだ。1840年8月の契約決定の際には、すでに11巻まで印刷に回せるようにしていた。年内に全40巻が出版されたが、それは二年がかりの彼の犠牲的な仕事のおかげである。というのも新版は正確さにおいても、旧版のあらゆる欠陥を取り除くよう指示されていたからである。だがその報酬として彼に提示されたのは300ターラーだっ

た！ コッタとしては、彼の正確な仕事に対して追加で 200 ターラーの特別報酬を支払う義務があると感じていた。二年間の財政的な結果として、エッカーマンには 300 から 400 ターラーの借金があった。その借金に関してエッカーマンは 1842 年 6 月 5 日に不平不満を述べているが、借金が弁済されたかどうかは不明である。ゲート関連の仕事はエッカーマンにとって割の合わないもので、オットーリエや彼女の息子達と親しくしていたために、彼の状態は二重に気まずいものだった。つまり彼は自分が受け取るものを彼女達から奪い取っているわけであり、またその一方で彼女はお金を必要としていたからだった。彼は控えめな人物だったので、自分がどうしても必要不可欠な人物とは感じられなかった。だから彼は結局、自分が拒絶してはいけない思っていたゲート関連の仕事に依然として取り組んだ。— 1841 年 2 月、彼はコッタのために一巻本のゲート詩集を編集した。彼は師匠のどんな詩行に対しても敬意を持って接しているが、読者の大多数にとって少なすぎるよりも多すぎる方が有害であるように思えたため、ページ数を 250 頁に制限した。「違いの分かる読者」<sup>(3)</sup> であれば、この本に一点の曇りもない喜びを見出すことができると考えたのだ。

ゲートに奉仕する仕事は決して途切れることがなかった。ゲート関連の仕事であれば、人のいいエッカーマンに問い合わせることが随分前から慣例となっていた。ゲートが 1831 年の最後の誕生日を過ぎたエルガースブルクに石碑が建てられることになった時には、エッカーマンはゲートがその地で書いた詩を入手することになったのだが、さらに胸像も一つ調達するよう依頼された。この祭りの主催者が言うには、手元には石膏でできた胸像が一つあるのみで、この胸像はおそらく破壊されてしまうとのことだった。「我々の愛すべき百姓達の破壊欲というものをあなたも御存知でしょう！」、祭りの主催者はそう述べている。1833 年、当時オルデンブルクのギムナジウムで副校長をしていたアドルフ・シュタールが、当地の図書館でゲートの『イフィゲーニエ』散文版を発見したことがあった。エッカーマンはシュタールからそれを出版する許可を得ている。またファルンハーゲンは、ブラスラウ出身の歴史家ゲーラウアーのためにゲート未発表論文を送るようエッカーマンに頼んでいる。エッカーマンはその原稿を送れなかったが、内容に関する詳細な情報を伝えている。ベルリンのインテンデンツラート劇場監督官タイヒマンもゲートの雑誌『プロピュライオン』の協力者について問い合わせている。タイヒマンは 1823 年に二回ゲートを訪問しているが、微笑ましい思い出話<sup>(4)</sup>が少なくとも一つ報告されている。

来訪者も多かった。ハイネがからか揶揄って言ったように、ゲートが故人である一方、『対話』の著者はまだ生きていて、その人物に会いたいという人もいたのだ。彼は観光名所であって、昔からある動物見世物小屋の一部だった。また重々しい推薦状を持ってくる人もいて、エッカーマンは彼らにワイマルに流の敬意を示さねばならなかった。誰もがエッカーマンに優しく接したというわけではなく、彼がファルンハーゲンの願いを叶える形でゲートの家を案内した若きモーリッツ・カリエールのように感謝しない人物もいた。学者達もやって来て、ゲートの色彩論の無意味さをエッカーマンに納得させようとした。例えば 21 歳のエーミール・デュボア＝レーモンもその一人で、彼には「報酬で雇われた召使の顔と態度を持つ、いかがわしい小男」<sup>(5)</sup> たるエッカーマンが、ゲートの光学理論に固執しているために、頭のおかしな人に思えたのだった。

その合間にエッカーマンは、ゲーテをよく知る友人として、大量に送り届けられる詩に目を通さねばならなかった。とりわけ文筆家として生計を立てたいと考えていたオットー・リーエの習作を読んで評価を下し、あらゆる方法で彼女を援助しなければならなかった。だが彼女の思い通りにはいかず、彼女の書く詩や小説はいつも彼の賞賛を得られたわけではなかった。雑誌『混沌』の編集作業でも彼女の手伝いをしなければならなかった。彼女が恋愛で苦しんでいた時でさえ、彼は彼女が信頼を置く人物だった。エッカーマンが気が気でなかったのは、ゲーテの収集品の今後の行方だった。収集品の購入に関して、ゲーテは息子が亡くなった後、ミュラー長官を介して大公妃と話し合っていた。専門家の意見も聞かれたが、その評価は芳しいものではなかった。つまり、それらの収集品はその所有者の個人的な必要性に応じて購入されたものであって、ほとんど一般向きではないとされたのだ。それらの収集品では自然史博物館や美術館はできない。だがそんなことよりも収集者が誰かということをお公妃は理解していなかった。ゲーテの家の売却についても大公妃は全く関与しようとしなかった。1833年、収集品のカタログ化が開始された。8年後、その運命が決まったようである。つまり、ゲーテの相続人達はそれらを売りに出し、ばらばらの形でゲーテ崇拜者に譲渡しようとしたのだ。エッカーマンは大公妃への請願書の中でこれに激しく抗議した。彼の要求は次のようなものだった。これらの収集品をばらばらにはしてはいけないし、ワイマルに置いておかなばならず、さらにこれらを購入することは全ドイツに貢献する国家行事である。またゲーテの最年少の孫ヴォルフをワイマルに雇い入れ、彼を繋ぎ留めておくよう要求した。翌年、ドイツ連邦が実際にゲーテの家を財産目録とともに六万ターラーで買い取ろうとした。結局、ゲーテの孫達は売却計画を断念した。エッカーマンの介入によって達成されたコッタとの契約のお陰で、彼らは妹のアルマに分け前を払うことができたからである。そんなわけでゲーテの家は無傷で残った。——だが絶えずエッカーマンの念頭にあって、あれこれと思索を巡らしたのはゲーテの文学遺産だった。とりわけ彼が気がかりだったのは往復書簡で、ゲーテの遺言でそうするように言われていたにも関わらず、相続人達は収集する書簡を決められずにいた。金銭上の利益になる見込みがあっても、彼らを投げやりな気持ちから誘い出すことはできなかった。

書籍出版業者はゲーテ関連の新しい本や雑誌ジャーナルを編集する際に、ゲーテの思い出を誤って伝えているために修正が必要になってくると、あたかもそうするのが運命であったかのように、専門家としての助言や意見をエッカーマンに求めてきた。雑誌に関して言えば、エッカーマンはゲーテと同じく反感を抱いていて、そこでは滅多に「ゲーテの専門家」として振舞おうとはしなかった。そのような臨時的な仕事の中で最良のものと言えば、1838年、ブロックハウスが『現代対話事典』のためにエッカーマンに書くよう執拗に説得し勝ち取ったゲーテ論文である。それはゲーテという人物と、その創作に対する一般的な評価に関するものだった。論文という狭い枠の中で、エッカーマンは特に自然科学者としてのゲーテを特徴づけた。それは今日でも注目に値するものである。

エッカーマンは自分がゲーテ関連の仕事に心を傾けているのが分かっていた。だがゲーテに関する注釈として、世間一般の目に留まりたくはなかった。だからあのゲーテ論文を通じてはっきりと言っておきたいことも出てきた。ブロックハウスは『現代対話事典』の中で、エッカーマンについても少し言及しておきたかったのだが、エッカーマンが耳にしたのは事典の項目 E ではなく彼自身のゲー

テ論文の補遺として「付随的に」<sup>(6)</sup> 言及されるということだった。彼は次のように述べてそれを断っている。「確かに私はゲーテの秘書であったと口々に言われていましたが、それは真実を述べたものではありません。人々が口々にそのような噂をするのは誤った情報を伝えられたからですし、ゲーテと私の本来の関係を知らないからです。ゲーテと私の関係は、生徒や協力者以外の何ものでもありません。この関係は私には極めてかけがえのないものとなりました。と言いますのも、自分自身を犠牲にして私はずっと暮らしてきたからですし、時々でしたがゲーテと食卓を供にして仲間に加えてもらうという楽しみもありました。そこで得られるものはもちろん精神的に大きなものでした。」<sup>(7)</sup>

エッカーマン自身がそう言っているにも関わらず、エッカーマンが「秘書」だったという作り話は、依然として文学史家の間でさえ幽霊のごとく現れている。だが本来であれば文学史家なら知っているはずだ。人というものは、おそらく自分の自由な意思決定によって偉大な人間に奉仕することができるものだ、ということ。そして、だからといってその人の召使いになったわけではない、ということ。

## 26. 夢想家

エッカーマンは昔から極度の夢想家で、彼が夢想するものは極めて美しい詩であった。この世の重荷から解放されて、彼の魂の触角は普段は隠されている限界を越えていった。ゲーテもそのような現象についてこう言ったことがある。「私達は皆、神秘の世界を彷徨っている」<sup>(8)</sup> と。エッカーマンはハノーファーで補助員をしていた時に貯金してゲーテ著作集を手に入れていたが、「あの方」は夢の中でも消え去ることはなかった。1821年、ワイマルとの最初の糸口ができた時、彼は夢の中でゲーテへの訪問を果たした。故郷から遠く離れたワイマルでは、フィアンセのハンヒェンが彼の夢の中で幸せな時を過ごしていた。アウグステ・クラーツィヒとの恋愛では彼は第二の愛の春を享受していたが、あたかも夢と覚醒の間を彷徨う夢遊病者のようだった。夢の中に彼の「書きかけの詩」が現れ、詩を「終わりまで持って行く」アイデアも浮かんできた。夢は彼にとって目印となり、幸福と不幸の予言者となった。また同時に脅迫し約束するものとなった。彼の気分を指し示すバロメーターだったのだ。

『対話』の最初の2巻の中で、エッカーマンは一度だけ(1826年12月27日)色彩現象に関するゲーテとの会話が頭から離れないために、夢の中でもそれに取り組んだことを述べている。彼自身の内部を覆うベールが何度も剥がされる第3巻になってようやく彼は、そういった夢について語っている。夢に関する彼の描写は優美さと文体の魅力に溢れ、どんな作家にとっても榮譽をもたらすものである。第3巻での対話の内容は、部分的に色褪せた思い出であったものをほとんど夢遊病的な創作を施して、色彩に富んだ生を呼び覚ましている。そうすることによってより深く彼の内部が掘り返されているのであるが、第3巻への橋渡するものとして、ゲーテ自身が彼に対話の続きを書くよう促した奇妙な夢がある。その夢の記録はおそらく第3巻の導入部として考えられていた。最初の2巻の影響力が強く残っていた時期に、エッカーマンはすでにそれを出版者に仄めかしている。それは彼の遺品の中に



見つかったが、次のように記されている。

1936年11月4日 月曜日

私達が昼間に熱心に取り組んでいるものが夜になっても夢の中にしばしば現れて、私達を悩ませるというのは古くからある真実です。ですからゲーテの死後数年間、毎日のようにゲーテの思い出が私の中にまざまざと呼び起こされていたのは、全くもって不思議なことではありません。しかも私は大抵、ゲーテを生きている人と見なしていました。私は彼と色々な話をしました。そして彼が死んでいないという嬉しい確信を抱きながら、いつも彼と別れたのでした。

前の晩も私はゲーテの家に行きました。今度はゲーテの息子も一緒でした。ゲーテはとても機嫌良さそうで、元気よく私の方に歩いてきました。しばらく会っていなかったかのように互いに挨拶を交わしましたが、その時私は自分の内部にある種の恥じらいを感じました。四年間ゲーテを訪問しておらず、またゲーテの夢を繰り返し見ているにも関わらず、「ゲーテが死んだ」という噂を信じていたからです。

ゲーテと彼の息子は帽子を被り茶色の上着を着て、殊の外、元気に素早く動き回っていました。二人の男性の印象としては、しばらく留守にした後で再び家の中に足を踏み入れて、愛着あるものに再会して興奮しているみたいでした。その際、彼らの顔色はあたかも自由な空気や風や天気によく晒されていたかのように、滌刺として、とても力強い表情をしていました。

心から挨拶を交わして、再会した際の最初の驚いた気持ちが少し落ち着いてくると、ゲーテが死去したという噂が世間に広まっていることを言わないわけにはいきませんでした。私はゲーテの手をつかんで、笑いかけながら大声で言いました。「人々はあなたが死んだと考えていますが、それは違うと私は絶えず言ってきました。今、私が正しかったことに大きな喜びを感じています。あなたは死んでいないのですね？」

ゲーテはいたずらっぽく私を見てこう言いました。「馬鹿な人達ですね。私が死んだとでも？ — どうして私が死んでいるのでしょうか！ — 旅に出ていたのですよ！ 道中、沢山の国や人を見てきました。去年はスウェーデンに行っていたのです。」

私はこう答えました。「こんなことを聞けるなんて嬉しくなりません。ですが、もっとお話する前に、私の『対話』をどう思ったかおっしゃって下さい。あなたは絶対にこの本を読んだことがあります。私にとって大事なのは、あなた自身の口からこの本をどう思っているか聞くことなのです。それはあなたも分かってくれるでしょう。」

ゲーテは答えました。「あなたの本は読みましたよ。あなたの書いたものは悪くありませんでした。賞賛せざるをえませんよ。旅行中も至る所で良い噂を沢山聞きました。分別ある男がこう言っていました。あなた自身の本よりも、この本の中にあなたの人格がよく表れている、とね。この男はそれがどうしてなのか聞きたがりました。私はこう答えました。南からの光の具合に由来します、と。」

「南からの光の具合」という表現が少し奇妙に思えたものの、この言葉がどれほど嬉しかったか想像できるでしょう。でも結局、この言葉をどのように見なし、どう考えてよいか私には分かりません

でした。

ゲーテは仕事をいくつか片付けるために書斎に入って行きました。私はゲーテの息子と取り残され、彼と一緒にいったイタリア旅行について陽気に語り合いました。私は縦長のトランクを開けて原稿を次々に取り出し、若きゲーテに見せていきました。私が約四枚に渡って書かれた一冊の大きな冊子をゲーテの息子に手渡した時、ちょうどゲーテが書斎から私達の方にやって来ました。その冊子はゲーテとの対話を綴った別の草案で、沢山の修正が施され、早めに仕上げたと思っていたものでした。息子の肩越しにゲーテはその冊子に視線を向け、彼の手からそれを取り上げてしまいました。ゲーテは冊子を読んで頁をめくっていきました。「ふむ」とゲーテは言いました。「面白そうだね。もう少し詳しく見てみることにしよう。」そう言うとゲーテはこの冊子を持って書斎に戻り、またしても私達二人は取り残されました。

私は若きゲーテとくつろいで話を続けましたが、嬉しい気持ちで一杯でした。というのは彼の内的な本性が桁違いに純化され、精神的な人格形成を積んでいたために、表明する見解も以前より高い段階からなされていて、さらに親子間の至る所に以前よりも親密な関係が生まれていたからでした。ゲーテがまた戻って来て我々の仲間に加わりました。冊子を私に返す時にゲーテは、説得力と上品さが加わるように暗示された対象をもっと詳しく論じるよう勧めました。ゲーテはこう言いました。「脈絡のない出来事やありのままの言及といったものは重要ではありません。しかしながら読者を状況の詳細に、つまり詳しい状況に導いていけば、読者をその対象の関心へ惹きつけていきます。すると読者は本物らしく作られたものが現実的なものだと思ってしまう。本物らしく作られたものを、そのような反映の中で読者は二度体験していると思うわけですね。この冊子ではこの種のことが沢山功を奏していました。この冊子が仄めかしているものが多少なりとも読者に等しいものであるよう心掛けて下さい。」

ゲーテがこのような善意ある言葉をかけてくれたので、私はこの種の試みをするようにさらに駆り立てられましたし、以前書き上げたこの冊子がある程度是認されたように思えてとても幸せでした。

この夜を私達にさらに一緒に過ごしたのですが、奇妙にもゲーテと彼の息子以外誰も現れませんでした。ゲーテの家族や友人、親類も現れませんでしたし、召使いさえ姿を見せませんでした。

夜明けに場面が変わりました。私達の背後に街があって、とても大きな川と荷降ろし場の役割を果たしている船着き場、さらに商人の扱う様々な荷物や、積み重なった樅の木の板がありました。岸辺には、修理中かその必要のあるボートがいくつか泊めてありました。大きな川の流りが昇り始めた曙光の中で輝き、私達の上空には澄み切った空の青さが広がって、半月が色褪せ始めました。空気が澄んでとても爽やかでした。川は右側に流れ、遠くの水面と広大な牧草地には霧がかかっていました。やがて霧が流れ始め、ゆっくりと立ち昇っていきました。三名から四名の男性を乗せたボートがこちらへやって来て、少し離れた牧草地の藪の中に着岸しました。都合の良い時まで品物を藪と葦の中に隠しておく密輸業者に違いない、と私は推論しました。

私は若きゲーテと自分達が目にしていることについて少し話をしましたが、その一方、ゲーテは口を開くことなく、むしろ物思いに沈んで、目覚めつつある朝方の自然と語り合っているように見え

した。

そうこうしている間に、岸边にはますます活気が出てきました。左側の眼下に見える街からは人々が入れ替わりやって来るのが見えましたが、外見からして何人かは旅行者で、何人かは労働者でした。その他の労働者は向こう岸ですることがあって、一緒に渡ろうとしていました。皆、大きな渡し船に乗り込んでいきました。その船は我々から遠くない所で出発の準備をしていましたが、次第に一杯になっていきました。

朝焼けは間もなく出現する太陽の光によって弱まっていました。一羽の立派なコウノトリが私達の近くを通り過ぎ、川を越えて向こう岸の湿地へ飛んでいきました。ゲーテも彼の息子もそのコウノトリの存在に気付きました。「雖に与える蛙を取ろうとコウノトリは飛んでいるのですよ」と若きゲーテが言いました。「父上、もう時間です。コウノトリは右の方に飛んでいきます。これは良い兆候です。では博士、さようなら！ 一緒に行こうとなさらないようですね。違いますか？ まだお仕事が残っているのですか？」

彼の謎めいた微笑みに答えながら、私は「はい」と言いました。「こちら側でまだすることがいくつかあります。」こうして私は彼に手を差し出して、二人の道中の無事を願ったのでした。ゲーテは渡し船の方に歩いて行きました。彼が口を開くことはありませんでした。あたかも話すのを禁じられたかのようでした。彼は私に手を差し出すこともしませんでした。船に乗り込む際にちらりと優しい一瞥をくれて僅かにうなずいてくれましたが、それはこの別れの唯一の仕草でした。

私はなだらかな傾斜のある岸を上の方へ登っていき、最初の家の近くで立ち止まると、この僅かばかりの高さから、川を下っていく船を見送りました。その時私は少しばかり奇妙なことに気付きました。つまり、他の乗客は色々な荷物や旅行鞆を携行しているのに、私のいわゆる気高い友人達は荷物を持っていなかったのです。彼らが身体的に何も必要としていないかのようでした。私は可能な限り彼らの方に視線を向けていました。二人が行ってしまったことは残念ではありませんでした。また別れの時も心からの感情の痕跡を感じることもありませんでした。全てがそうならざるを得ないように思われたのです。二人を乗せた船が向かっていく南東には果てしなく広がる平坦な牧草地があって、そこには思わず立ち寄ってみたいくなるような雑木林もありました。近くには建物も見えませんが、遠くを見ても塔の先端も視界に入ってきませんから、そこは人間の住んでいない土地だと推論しました。

## 27. ゲーテはさらに語る

亡くなった師匠の声が弟子に届かなくなることはなかった。1836年11月4日の奇妙な夢が示しているように、その声は昼も夜も弟子に語りかけていた。この夢の中で冥界から帰還したゲーテはエッカーマンに対話録をさらに推敲するよう忠告していたが、エッカーマンは生前よくそのような忠告を受けていた。そういった忠告があったからこそエッカーマンの本は芸術的に成熟したのだし、実際に一つのゲーテ講演録へと格上げされたのである。

エッカーマンの日記にはまだ「ゲーテとの対話を綴った別の草案」が隠されていたし、友人達への



手紙でも、彼はよくゲーテとの交際について語っていた。だから彼はそのような手紙の写しを大抵手元に残しておいた。『対話』の最初の2巻のどのページを見ても、書くための材料が有り余るほどあったことが分かる。だが彼は完全なものを書くのを意図的に避けた。彼が残したのは1841年にリーマーが書いたような「ゲーテについての報告」ではなく、ゲーテ自身の言葉によるゲーテの自画像だった。エッカーマンの本とは対照的に、リーマーの本は多彩な色染みでしかなく、心配になって色々掻き集めたモザイクの寄せ集めであって、中身がぶちまけられたカードボックスだった。エッカーマンは材料を有り余るほど持っていたが、制限を加えた中で賢く振舞う術を心得ていた。

『対話』に対する批判には彼はほとんど文句を言わなかった。実際、文体が少しごつごつしている箇所もあったし、あれこれと奇異な事実も書かれていて、もっと詳しい説明が必要だった。だがおそらくエッカーマン自身も、もっと多くの美的な欠点があるのに気付いていた。本が印刷されることで、著者も内容を客観視することになるからである。自分にはもっと多くのことができるはずだ、と考えたのかもしれない。いずれにせよ彼の考えは、自分の人生の中心たるゲーテの周りを絶えず回っていた。もし彼が著作集を編集する際に『詩と真実』やその他の自伝的著作をもう一度読む機会があれば――目の前に沢山の思い出が蘇ってきたことだろう！彼はすでに早い段階で補遺について口にしてはいるが、それを第二版でやりたかった。だが急ぐことでもないし、新版が出る予定も全くなかった。第3巻を出すことの方が自然な流れだった。そうなれば出版者も手を貸してくれるだろう。だが色々なことがあって、その計画は先延ばしになっていた。例えば、その間には『詩集』を出版して散々な結果に終わっていたし、病気にもなって人生に対する不安も抱えていた。またゲーテの新版に二年間取り組んでいた。1841年になってようやく彼はそのために必要な自由を手に入れた。

だが今になって日記や手紙を読み返してみると、一冊の本になるくらいの十分な材料がないのではないか、という疑念が湧いてきた。古い記録の中の最も素晴らしい箇所はすでに利用されていた。彼はゲーテと極めて活発に交際した歳月を通じて、ほんの僅かな、しばしば謎めいたキーワードを書き留めていた。脈絡のない音の中から完全なメロディーを作り上げる技術に彼は精通していた。彼は日記をいつもすぐに書かず、よく何日も何週間も寝かせた。「些細なものがなくなって、大事なものだけがあとに残るからです。」1844年の手紙の中で、彼はラウベにそのように書いている。1842年に書かれ、第3巻の見本として『ハンザ - アルバム』に掲載された1828年3月11日の長い対話が、日記の中の僅かなキーワードから生まれたことをこの手紙の中で述べている。そのキーワードとは「夕方、ゲーテ宅、興味深い会話、生産性、天才、ナポレオン、プロイセン」である。彼は「例えば古代の彫刻の左手と右の太腿を見て、そこから彫刻全体を生み出してしまう彫刻家の例」を挙げている。3月11日の会話の内容は、彼の念頭には「まだ漠然と浮かんでいるのだが、比較的長期に渡って考えてみると主要部分がはっきりしてきて、精神の結晶化という法則に従って再びしかるべく結びついてくる」のだった。彼は四週間に渡ってこの対話に集中して取り組んだ。なぜなら、このような技術には極度の集中力と自由で楽しい雰囲気、さらにはたっぷりの時間が必要だったからである。彼はゲーテの警告を肝に銘じていたので、「脈絡のない出来事やありのままの言及」をせず、最初の2巻でとてもうまくいったように、読者を「状況の詳細に」導こうとした。だがこのオリンボスの住人に新しい特

徴を与え、新たな照明で照らしてやるために、今度は別の角度から描かなければならなかった。彼はそのための力や蓄積や時間を見つけられるだろうか？ 第3巻をすぐに完成させるのは、彼の生計に関わる重大問題だった。ブロックハウスもこう促した。そろそろ頃合いです、第3巻は売り上げが落ちている最初の2巻を復活させてくれるはずですからすぐに出さなければなりません、と。

抜け道が一つあった。つまり他人の材料を使えばいいのであって、実際、彼はもう何年も前からそういう申し出を受けていた。友人のソレもゲーテとの対話を記録していて、すでにあるスイスの雑誌に対話の中からいくつか報告を載せていた。それらのうちエッカーマンが読んでいたソレの報告は素晴らしい出来だった。だからエッカーマンはしきりにこのワイマルの思い出を出版するよう迫り、彼自身もそれを翻訳するつもりでいた。だがソレは非常に多忙な人物だった。自然科学者であり収集家であり、おまけに共和制をとる故郷の活動的な政治家だったのだ。ソレが1830/32年に行ったゲーテとの対話は、1835年時点ですぐに印刷に回せる状態だった。だが日記や手紙を点検しているうちに3年の月日が経過してしまい、仕上げが終わった時には、単独で出版するには全体的なまとまりに欠けるように思われた。エッカーマンの『対話』の新版の補遺として使ってもらうのが一番好ましいのだが、とソレは考えていた。だがその希望はほとんどなかったので、ソレは原稿を手元に残しておいた。1841年になってようやくエッカーマンは、第3巻を近いうちに送り届けられないのが分かった。ソレの思い出を利用すれば作業を軽減できるので、今になって原稿を渡してくれるようソレに頼んだ。ソレとエッカーマンはゲーテの最年少の取り巻きで、このオリンピアの住人の最後の10年間には二人の共通の体験だった。二人はゲーテの食卓を囲み、書斎の心地よい薄明で時を過ごした。ゲーテは同じ言葉を繰り返したり、思慮深い見識を述べたり、色々な解釈が可能なメフィストフェレスのような謎めいた意見を述べたが、それらは二人の中でずっと鳴り響いていた。二人がゲーテの家を後にすると、近くに住んでいたエッカーマンはこの友人に同行し、人通りのない道を通って城まで行くか、またはベルヴェデーレの並木道まで歩いて、話の内容を明確にしたり理解しようと努めた。ソレとエッカーマンという両面からの記録であれば、似たような言葉やほとんど同じような言葉を使って、多くのことが記録されているに違いない。

1841年10月、ソレはエッカーマンにではなく大公妃に原稿を送った。ソレはワイマルから終身年金を受けていて、以前の教え子やその母親を怒らせてしまうようなことは絶対に公表したくなかったのだ。ソレはワイマルの状態に対していつも少々批判的だった。だから大公妃に最初に原稿を読んでもらい、何が出版に相応しくないか決めてほしかったのである。その中のいくつかはソレ自身が線を引いて削除していたし、読めないように塗りつぶしていた。また数枚の紙を一枚の封筒に入れてワイマルで開封されるようにさえた。大公妃はかなりの分量のあった原稿を読んで、憂慮すべき記述を沢山見つけ出した。それから息子の皇太子に、エッカーマンと共同で一行一行チェックするよう頼んだ。利用できそうにないものは全て皇太子自身の手によって青色のペンで印が付けられた。皇太子は警戒すべき文章や段落の端に「非公表」または「注意」と書き込んだ。こうした丁寧な検閲によって、エッカーマンはソレの文章のほぼ半分を失ってしまい、本のための収穫物は期待していたよりも少なくなってしまった。彼が利用していいのはせいぜい1822/23年と1830/32年の記録ぐらいだった。そ

の他の理由もあって沢山の内容が削られた。ソレが物語っている出来事の多くが、すでにエッカーマンによって最初の2巻に書かれていたのだ。また原稿から残ったものに手を加えていると役に立つものも出てきて、是非ともそれを借用したかったのだが、そこに予期せぬ問題も浮上してきた。最初の2巻ははっきりと際立ったスタイルで書かれていたのだ。それは言語的観点からだけではない。多様な素材を選別・グループ化し、個々の対話を積み上げ、居心地の良い狭い場所から果てしない広がりを見渡し、その逆に、果てしない広がりから狭い場所に移行するといった魅惑的な転換があって、生き生きとしたリズムを持つゲーテの言葉と一致するよう絶えず努力がなされていて、幾度もそれに成功していた。第3巻ではこうした芸術的な統一性を歪めたり混乱させてはならず、個々の持ち味を解体させてはならなかった。つまり第3巻で、ゲーテは最初の2巻と違った話し方をしてはならなかったのだ。エッカーマンの新しい原稿とソレの日記<sup>(原注)</sup>が同じ出来事を記録していても、それぞれが別の詳細を書き記していて、個人的な見解や気分の違いによって著しい差も見られた。その結果、もはやほとんど似ていない思考過程を一つにまとめることが難しくなっていた。その一方で、もしエッカーマンが他者の紡ぎ上げた話を取り入れてしまえば、すぐに行き詰ってしまうことになる。つまり、自分に対してゲーテはこれまでと違う話し方をしていることになるし、話しかけていたことになるのだ！だから彼は他者が紡ぎ上げた話をほとんど無意識的に自分の力で書き繋いでいった。こうして一つの対話が完成した。確かにこの対話はソレのメモに刺激を受けたものだが、彼によって伝えられたものと見なすことはできない。矛盾した二つの異なった人格を完全に克服することはできないし、彼らの性格、関心、内的体験はあまりに異なっている。二人は融合することに抵抗する「二重反射」なのである。ソレのたっの願いは、自分の記録が単に原材料としてエッカーマンの役に立ってほしい、ということだった。情報提供者として挙げられることすら望まなかった。だがエッカーマンは文学的な良心の前で、内容に責任を持つことができなかった。だから彼はソレの日記に従って手を加えた報告(全体として第3巻の四分の一に満たない)を他者による補足部分として目立たせることを選び、友人の永続的な援助に対して前書きで感謝の言葉を述べた。こうして彼は文学的な名声の一部を友人に分け与えたのである。だが彼は同時に、友人に対して責任も分け与えたのだ。

ソレからの文学的な借用によって時間を稼ぎ、第3巻をより早く出版するのがエッカーマンの希望だった。だがこれも計算違いだった。他者の文章に手を加えるのは難しい作業だったし、年を重ねるごとにエッカーマンの身に無慈悲な運命の不幸が降りかかってきたからである。

## 28. 宮廷顧問官エッカーマン

『ゲーテとの対話』を書き上げてからというもの、大公妃はエッカーマンを引き立てた。大公妃は彼を支援し励まして創作を続けさせた。「大公も」と彼は1836年5月26日にソレに書いている。「私にとっても優しくなりはじめています。」それはこれまでなかったことである。これよりもさらに嬉しいことがあった。宮廷に招待されたのだ。ワイマルではすごいことなのだ！ というのも、ワイマルで人間はやっと男爵になって始まるからである<sup>(9)</sup>。劇場でさえ善人と悪人は厳しく区別された<sup>(10)</sup>。二

階席では貴族は右側に、一般市民は左側に座ることになっていた。ワイマル最古の貴族出身の女性ヘンリエッテ・フライイン・シュタイン・ツォー・ノルト・ウント・オストハイムが、美術館長を務める一般男性ルートヴィヒ・ショルンと結婚するつもりであるという恐るべき報告を受けた時、大公はすっかり途方に暮れてしまった。マリア・パヴロヴナも女官に対してあからさまに、この侮辱に対する文句を述べたほどである。不運にあった後でショルンは即座に貴族に列せられたが、スキャンダルは収まらなかった。この夫妻は抗議運動をして、劇場で左側の市民の席に座ることに固執したのだ。1807年になってようやく政治的な功績が認められ貴族に列せられたフォン・ミュラー長官も、苦勞の甲斐あって宮廷の集まりに加えてもらえるようになった。それは昔ながらの礼儀規範に反していたからだ。

正式に「宮中参内資格」を持つようになり、地位や制服がなくても大公妃の文学の夕べとその後の晩餐会に参加許可が下りたのは、平凡なエッカーマン博士にとってまさしく大勝利だった。1836年3月29日、この名誉が初めて彼に与えられたようである。これまで宮廷に抱いていた不安な気持ちを克服しようとして、自分がどれほど身分の高い人々と近頃同席したか、まんざらでもなく友人達に語っている。ヴィンゼンの農夫の息子が宮廷社会で好印象を与えることなど想像できはしない。だが彼は今やワイマルになくしてはならない前途有望な作家なので大目に見てもらえた。1837年1月、ブロックハウスは二回目に出す『対話』の1500部を「索引付きの第二版」として告知したが、それは出版者と著者の間で秘密裡に行われた出版上の作戦だった。この本の成功は確実に思われた。2月にマリア・パヴロヴナは夕べの集まりで二回、エッカーマンの詩を朗読させた。この頃、彼の星はワイマル宮廷の頂点にあった。さらに彼は今では大公妃の図書館の管理を任されるまでになっていた。これは亡きワイマル首席司祭フローフストが行っていた仕事だが、300ターラーが追加で支払われていた。皇太子との授業も継続され、1837/38年の冬にはエッカーマンは週三回、皇太子とシェークスピアを読んだ。

だが1838年という年は心配と幻滅しかもたらさなかった。エッカーマンの故郷ヴィンゼンが洪水に見舞われたのだ。姉と、1830年に亡くなったもう一人の姉の息子が被災した。彼はこの甥をガラス職人にさせ、親方になれるよう秋には60ターラーを送った。六週間前に結婚していたこの甥は今では無一文となっていたのだ。ワイマルの叔父は甥を助けなければならなかった。4月に彼は苦境にある親族のために、オッティリーエから100ターラー借りた。何年も前から計画していたカーライルを訪ねるためのイギリス旅行も断念しなければならなかったし、夏には健康のためにイルメナウで水治療法に取り組まなければならなかった。『対話』の売れ行きは絶望的なまでに緩慢だったし、彼の『詩集』に関して言えば、世間は全く知ろうともしてくれなかった。『詩集』が彼にもたらしたのは、賞賛というよりはむしろ嘲笑だった。自分の力で文学的な経歴を積み上げていくという夢は色褪せていき、それによって宮廷に瞬いていた彼の星も沈んでいった。宮廷でも彼の『詩集』についての意地悪な批評が流布していた。彼は真面目に取り合ってもらえず、文学の夕べに参加しても、もはや何も話題にされることはなかった。それは大公妃の支援に関しても同じであった。大公妃は彼とその将来の作品に期待を寄せはしなかったのだ。彼には300ターラーの給料が支払われていたが、それは決して仕事の代償としてではなかった。彼は図書館の管理を任されていたが、国として費用はまったくか

からなかった。皇太子の授業が継続していたので、彼の仕事は倍になったわけだが、給料は毎年同じだったのだ。女性のいない家計は高くつくものが、彼は貯金をすでに使い果たしていた。1838年10月、義兄のヴィルヘルムにこう嘆いている。「私の当地での状況は光り輝く惨めさと言えるものです。心から元気づけてくれるものが全くありません。心配と憂鬱は私の心を蝕んでいます。」彼は年末にはオットーリエと熟考を重ね、大都市に引っ越すのはよりよい方法とは言えないから、またイギリス人に授業をするのかどうかと相談している。

これ以降も給料が上がることはなかった。その代わりに彼は、1843年2月、「大公家のために成し遂げた職務と文学的な業績を評価して」宮廷顧問官に任命されたのだ！ 今や制服と剣を身に着けなければならなくなって、仕立て屋で借金をしたのは間違いない。身分は高くなっても状況は全く変わらなかったが、宮廷顧問官という称号はその現実に反し、影響力を持つというイメージを呼び起こした。だから大公にお願いがある人々が絶大な力を持つ宮廷顧問官に援助を求めてきた。着服したお金（二三千ターラー）を返済することによってのみ投獄を免れることのできる若者もやって来たとし、宮廷顧問官の執り成しによって職が得られなければ自殺すると脅かす困窮者もいた。「ゲーテがそれほどまでに信頼してその価値を認めていた」人ならば、ドイツ全体に対する心もお持ちのはずですと言って、共和制主義者としてその身を追われてワイマルに庇護を求める者もいた。予約注文者はエッカーマンの周りに群がったし、役者からは劇場で雇ってほしいと言われ、踊り子でさえ彼に自己推薦してきた。またゲーテの後継者を自認する——絶えず貧乏であることを言い訳にしている！——若者達が、山のように沢山の詩や戯曲、果てはオペラさえ送ってきた。料理本さえ彼に気に入られようと送られてきた。要するに彼はあらゆるディレタント達の庇護者となったのだが、そういった人達は彼の不運に終わった詩集を読んで、磁石のように引き寄せられたのだった。これらの手紙の郵送料も彼はすでに工面できなくなっていた。おまけに1843年の春以降、エッカーマンはブロックハウスと裁判をして絶望状態にあり、第3巻に取り組みなくなっていた。彼がワイマルに縛り付けられていたのは単に困窮していたからだった。その困窮の中で消耗していった一方、馬鹿げた称号以外何も提示されなかった。すでに博士号の称号のことで自分を恥かしく思っていた！ 彼ははっきりとしない約束に繋ぎ留められていて、ライフワークの完成が怪しくなっている今になっても、完全に見殺しにされていた。

こうした極めて厳しい状況にあっても、彼は死に物狂いになって前に進もうとした。第3巻の試作として、1842年の『ハンザ - アルバム』に1828年3月11日の対話を掲載したのだ。それはよい出来だったが、「内容的には非常に重い」ものだった。この中で彼は、アレクサンダー・フォン・フンボルトや、元プロイセン皇太子で芸術や科学を優遇したことで知られる現フリードリヒ・ヴィルヘルム四世の名を挙げた。この対話の中にプロイセン皇太子に関するゲーテの予言的な言葉が述べられているが、それは国王と詩人を同列に表敬するものだった。1841年、フンボルトはワイマルで『対話』の著者に自己紹介していた。だからエッカーマンも1843年6月23日、『ハンザ - アルバム』に掲載された自分の対話をフンボルトに送ったのだった。エッカーマンはフンボルトに対して「国王陛下が自分に関心を寄せ、できれば陛下から寵愛を」<sup>(11)</sup> 与えてほしい旨を正直に告白している。なぜな



ら彼はゲーテのために仕事をして『対話』を成功させたにも関わらず、「地球の分割」<sup>(12)</sup>に全く関与できなかったシラーの詩人達よりも恵まれない境遇にあったからである。だからエッカーマンは半年間ワイマルから離れて、世間から離れた静かな環境の中で第3巻を完成させるために支援をお願いした。――

あるプロイセンの軍人が、文民のフンボルトに王の控えの間で会ったことがあった。軍人は威圧的に質問した。「あなたはどなたですか？」――その返事は「私の名前はフンボルトです」だった。世界的に有名な人物の名前をこの軍人は知らなかったので、続けてこう尋問した。「職業は？」――「プロイセン王陛下の侍従です」と『コスモス』の著者は答えた。「他には？」と軍人は軽蔑するように言い、後ろを向いてこの地味な内宮官を無視して行ってしまった。芸術と科学を担当する侍従としての身分でフンボルトが成し遂げたことは今更賞賛してもしきれないが、彼はこの責任の重い職務を好意溢れる礼儀正しさで行う術を心得ていた。そのことは彼が7月18日にエッカーマンに出した返事からも見て取ることができる。彼は自分であの送付された対話をプロイセン王の前で朗読し、エッカーマンが小旅行をできるよう、王から100ドゥカーテンをしばり取ったのだ。旅行すればあなたの心が朗らかになって元気を取り戻すでしょうし、「文学」つまり『対話』のような「独創的でありながらも控え目な作品」<sup>(13)</sup>ができるのはそういった元気があればこそなのです、と彼は書いた。

一番困っていた時にこの援助はありがたかった！100ドゥカーテンは360ターラーに相当し、ワイマルの宮廷顧問官の年収以上だったのだ！施してもらったお金を使って彼はノルダーナイ島に滞在し、体を休めることができた。また翌年にはこの施しのお陰で、自分を縛り付けているように感じていた拘束を断ち切ろうとした。――このお金は彼にワイマルを去るという勇気を与えたのだ。それは本当の救いだった！確かに彼はワイマル大公の宮廷顧問官であり、ロシア大公妃マリア・パヴロヴナ陛下の司書だった。そんな彼がプロイセンから支援をお願いしなければならぬ状況に陥り、実際にそれを受け取っているということは、パトロンでありヨーロッパで最も裕福な大公妃の一人マリア・パヴロヴナには間違いなく気まずいものだろう。それをエッカーマンも恐れていたが、すでに旅行に出ていた7月24日には、友人のムスクルスにこの幸せな出来事を報告し、次のように述べている。「プロイセン王の支援について、ワイマルでは何も言わないことにしましょう。」

## 29. 故郷の声

1823年、エッカーマンが自らの小舟の錨をワイマルに下ろした時、しばらくの間は精神的財産をたっぷり蓄えて、それから再び低地ドイツの故郷に針路を向けること以外何も望んでいなかった。だがゲーテが生きている間、彼はこの港から離れることはなかった。この若者が自分の将来の計画と故郷で帰りを待ちわびるフィアンセのことをほとんど忘れてしまったのは、その名前が持つ輝きだけでなく、この偉大な人物の個人的な魔法があったからであり、彼だけに向けられた愛があったからである。ゲーテの元にいると実践して役立つことが見出せたとし、精神的に最高の生き方をするための魅力に溢れていた。それは子供の頃から憧れていたものだった。この控え目な協力者から生まれてくるの

は師の作品に没頭する友人であり、ゲーテが望んだような、感謝して受け入れつつも工夫を凝らして似たものを作り上げる読者のお手本であって、また精神的遺言の実行者であった。チューリングンでいつも彼は、自分はやそ者のままなのだろう、と感じていた。だが彼は、ゲーテにとって有用であり続ける限り、故郷からの警告を将来への空しい希望で宥めた。そして「私が活動する場所が故郷なのだ」<sup>(14)</sup> という標語を自分に言い聞かせた。

ゲーテの死によってワイマルでのエッカーマンの使命は終わったかに見えた。すでに 1833 年には彼はここを立ち去ろうとしていた。だが、他の誰にもできないゲーテの遺作の出版、経済的な困窮、結婚と家庭内の決定的な不幸があって、彼は移動の自由を奪われていた。『ゲーテとの対話』が彼を貧困という奴隷状態から引き離すはずだった。だがそれもうまくいかなかった。周りの人達は彼の名誉心をくすぐり、用意した二三百ターラーに飛びつかせた。何の心配もなく文学にだけ身を捧げる将来を与えようとしているのだと彼には思えた。『詩集』を出しても期待を裏切ってしまう、故郷にいた 20 歳の時よりも貧しくなっていた。つまり、はした金程度の僅かな給与しかもらえない、非正規雇用の小役人以下の収入だったのだ。彼は年々、青春時代を過ごしたあの田舎が恋しくてたまらなくなっていた。「チューリングンの冷たい大地」の空気も彼の神経を狂ったように掻き乱した。沿岸地域の出身は変えようがなく、海の近くの広大な平野でのみ自由に息が吸えるのだ。だからチューリングンの山の多い景色ばかり見ている気が減入ってしまった。1828 年、彼はフィアンセにこう書いている。「私はこの冬をワイマルでなんとか耐え凌ぎましたが、夏になると大抵故郷が恋しくなります。ここでは本来、夏というものにもならないのです。蛙や虫の鳴き声も聞こえてきませんし、夜も暑くなく、夜空の煌めきもありません。エッターズベルク山が北西の素晴らしい眺めを黒く覆ってしまいました。二三日、私はゲーテに広大なエルベ川近郊の町シュターデで過ごした素晴らしい夜と、10 時半になってもまだ日が出ていることを話しました。」<sup>(15)</sup> 彼が全身全霊どれほど深く低地ドイツの大地に根を下ろしていたかは、心を込めて細密画を描いた少年時代の思い出や、とりわけ『対話』の自伝的な前書き、または故郷に寄せた一片の詩を読めば明らかである。長大な讃歌「故郷」は 1838 年の『詩集』を締め括るものである。その中で彼が思い切りよい色合いで描き出したのは、ハンブルクの港と通りを行き交う彩り豊かな雑踏である。なぜならハンブルクは彼によって「大きな生命」そのもので、少年時代、最も強い印象を受けたものだったからである。ハンブルクに休暇旅行に出かけると、彼は当時の印象を何度も懐かしく蘇らせた。彼は少年になったつもりでこの地を歩き回った。この熱っぽく動き回る世界を初めて目にした時、最初はひどく恐ろしかったが、その後はこの町が魅力的に映った。なぜならこの地では全てが少年時代の体験に繋がっていたからである。その体験とは、年老いた父親との最初の訪問であり、見知らぬ男の予言である。その予言に嬉しくなって、神への信頼で満たされたのだ。臨港地区は特にお気に入りの場所で、それに比べれば故郷のヴィンゼンの活気も取るに足らない小さな支流であって、水夫や漁師や市場の商人が行き交う流れに吸収されていくのだった。

これこそが生命だ！ 誰もが自由を感じている！

少しだけでもここにいられたら、私も気分よくいられるのに。<sup>(16)</sup>

彼はここで何度も馴染みの面々に遭遇した。この時は漁師用の橋の上で「少年時代の古い仲間」に遭遇したのだが、この人は当初、見知らぬ「紳士」がエッカーマンだとは分からなかった。また、乗客をハンブルクへと運ぶエーヴェル型帆船の操縦士にも遭遇した。エッカーマンはこの人物の帆船に乗り、満ちゆくエルベ川を遡りながら故郷のヴィンゼンへ帰って行った。子供の時と同じく、蛇行するイルメナウ川とルーエ川を經由しながら。このハンブルクへの賛歌は、静かな田舎町で過ぎた遠い子供時代への哀歌となって幕を閉じる。

汝、子供時代の川、愛するルーエ川！

手にお前の水を感じさせてほしい！

いつものようにお前は粒の細かい砂の上を流れてゆく――

ああ、また子供の時みたいな感覚になれたら！

お前はまだ20年前と同じくらい若く、

ほとんど白髪となってしまった私を見つめている。

運命の星が不安そうに私を遠くから見つめ駆り立てた。

だから私は賢者達から学んだのだし、高貴な人物に仕えたのだ。

私はポー川にも地中海にも行ったことがある。

ヴェニスのも行ったし、ローヌ川の満ち満ちた水を口にしたこともある。

ライン川も見だし、北海の波がうねるマース川を目にしたこともある。――

だがお前はささやかな場所で静かに流れ続けていた。

お前の運命が私のことを妬んでいるように思えてしまう！

私は一体何を手に入れたのだろうか？――もう私を黙らせてほしい。

太陽は静かに大きく沈んでゆく。

活気のあった一日が終わろうとしている。

長い間歩き回って疲れきった旅人も

愛する人の胸に抱かれて元気を取り戻すのだ。<sup>(17)</sup>

だがこのような希望が叶えられはしなかった。ノルトハイムとハノーファーにいる二人の義兄も、エッカーマンとまだ女性の面倒を必要とする彼の幼い息子に対して、喜んで一軒家を提供するつもりでいた。著述業では食べていけないことは『対話』の僅かばかりの収入が示していた。それ故、義兄のヴィルヘルム・ベルトラムはかつてのハンヒエンのように、何とかして彼をハノーファーで就職さ

せようと根気強く頑張った。1837年、カンバーラント公がエルンスト・アウグスト二世として王位に就いた時、ようやくヴィルヘルムは義弟のために何かが起こるだろうという確信に満ち溢れた。だがエッカーマンは就職活動をするには全く使いものにならなかった。まず彼は『対話』の中に MARIA・パヴロヴナへの献呈文を書いていた。大のゲーテ崇拜者と見なされている現王女フリーデリーケ大公妃にどうして献呈文を捧げなかったのだろう？ そのような非難がハノーファーでは密かに囁かれていた。1836年、彼はノルダーナイ島にいたのだが、当地に逗留中の皇太子を表敬訪問する勇気も持てないでいた。王女は皇太子に対して、廷臣の一人を通じて、『対話』を「非常に多くものが結びついたもの」と言っていたにも関わらずである。彼は王女に恭しい文面を認めた書簡を送ろうとさえしなかった。ヴィルヘルムはこの遅れを取り戻すようエッカーマンを促さねばならなかった。それを受けてまずエッカーマンは、1838年4月8日、王女に『対話』と出版されたばかりの『詩集』を送り、自分が「生粋のハノーファー人」<sup>(18)</sup>であることを遠慮がちに思い起こさせ、今こそ祖国の芸術と科学のためにも幸福な時間が始まってほしい、という希望を述べた。より重い価値をこの発送物に与えようとしてゲーテの手書きの紙片を同封した。四ヶ月後、返礼品として慣例的な金製の容器を受け取った。この返事は慈悲深いものだったが、祖国が彼の喪失を嘆いていないのは明らかだった。彼はひどく失望した。「私がハノーファーに戻って来られるのは、全くもって不可能ではないだろうか？」と10月6日、義兄に述べている。「当地には若い頃の友人もいるのですが、ここでは全くの孤独ですし心細いです。そんな気持ちが私をすっかり憂鬱にさせてしまい、私の中に眠る才能も全て止まっています。」だがこの義兄は、彼が感謝状を出す義務があることを思い出させねばならなかった！ 10月20日、エッカーマンが義兄に手紙を書いて、ようやくいくらか事情が明らかになってきた。すでにエッカーマンは感謝状<sup>(19)</sup>を送っていたのだ。彼はその中で「克服しがたく」見える「運命」によって、絶えず自分が祖国や若い頃の友人から遠ざけられていることに遺憾の意を述べて、また手紙と容器という「二重に高価な贈り物」が「幸福な未来という希望」を呼び起こしたことを添えて、自分の孤独な人生を美化する計り知れない恩恵をさらにもらえるよう、貴重なゲーテの手書き原稿をいくつか同封した。その手紙を最後に王女との手紙のやり取りは途絶えた。

ヴィルヘルム・ベルトラムはまだエッカーマンが王女の司書として宮仕えすることを希望していた。だが、あらゆる宮廷の空気に対してエッカーマンが示していた嫌悪感は、1836年以降、ワイマルでの経験を通じてさらに強くなっていった。1841年4月21日、義兄に次のように書いている。「王女の所で働くのはおそらく私に相応しいことではなかったでしょう。ですが、それを覚えてくれたあなたの愛情には感謝しています。宮廷から離れていれば、どんなに人より目立たない自由な仕事でも喜んでやるでしょう。意に反して、私は運命によってこれまでこの地に繋ぎ留められてきました。私は精神的な柵に閉じ込められて、それを突破できないでいます。ですが、私は依然として解放される時が訪れるのを待ち望んでいます。」差し当たりはまだワイマルに留まるという考えと、彼は良かれ悪しかれ折り合わねばならなかった。彼はこの地ではとっくに自分は用済みだと感じていて、自分の時間を「みっともなく」浪費していた。宮廷がいつもそうしてきたように、そのうち彼を僅かな給与で退職させて、どこか寂しい場所に——もちろんそれは故郷のことだが——隠居するのを許可するだ

ろう。彼は夜になるとよく、こうした自由が与えられる夢を見た。そして嬉し涙を流しながら目を覚ました。彼は「ハノーファー新聞」を定期購読していて、当時始まったばかりの鉄道工事を固唾を飲んで見守っていた。一体いつになったら鉄道が完成して北へ行けるのか、そして鉄道はハノーファーやハンブルクへの旅を短縮してくれるのかと思いながら。

休暇に出ると、彼が辿る道はほとんどいつも同じだった。義兄クリスティアンのいるノルトハイムからヴィルヘルムのいるハノーファーを経由し、ハンブルク、ブレーメン、ヘルゴラント島、ノルダーナイ島へ向かった。1835年、彼は「ヘルゴラント島の漁師の歌」を書き、イギリス人ブライアントの詩「水鳥に寄す」を翻訳した。カーライルのロンドンの家には彼の部屋が用意されていたにも関わらず、イギリスへ行くという願いは叶えられなかった。しっかりイギリスが見据えられるよう、1838年には造船に関する研究に取り組んでいたのだが、イギリスへ行く代わりに、医師が水治療法するよう彼をイルメナウへと送り出した。ハンブルクに憧れていたにも関わらず、彼は都会人とは正反対だった。静かな場所で仕事に集中したい時はワイマルからさえも逃げ出した。すでに1822/23年には『論集』をハノーファー近郊の小村で書き上げている。1835年、ヘクスターで過ごした孤独な夏には『対話』の最後の仕上げをしたし、この地でようやく新しい詩を完成させることができた。『対話』の第3巻もワイマルでは進捗しようとしなかった。彼は故郷でそれを完成させたかったし、ゲーテのことなど何も知らないどこかの庶民に接しながら完成させたかった。田舎にいと安心感が得られ、貧しくとも幸せだったかつての農夫の少年に戻れた。彼は完全に彼自身でいられたのだ。彼の喜びは自然や動物、子供や庶民、そして手工業者の手仕事に向けられていたが——老ファウストのように「鋤のカチカチという音」<sup>(20)</sup>は農家の息子である彼にも気持ちのいいものだった——そういったものへの愛着があったために狭い大都市から平地へと向かうのであって、小さな居城がもたらす文明の拘束服には耐えられなかった。押しつけがましい好奇心、うわべだけの教養、空虚さと虚偽に囲まれて、孤独を愛する彼の性格は、やがて病的な人間嫌悪へと変わっていった。ワイマルには彼に好意的な人がいないわけではなかったが、心の底では彼らのよそ者であり続けた。移住してきたプロレタリアと裕福な市民、そして地元の名士の間に横たわる社会的な隔たりは、宮廷顧問官という称号があっても乗り越えられなかった。ゲーテ亡き後、この奇妙な人間を気にかけてくれたのはソレだけで、彼と並んでオットーリエ・フォン・ゲーテもまた、その安住することのない放浪生活にあって、時間の許す限り彼を支えてくれた。彼には青春時代、心の友がどれほど沢山いたことだろう！故郷へ旅する時はいつも小村や田舎町を訪問して、かつての仲間達から喜んで迎え入れられた。手紙を書くのも億劫で、何年も自分の消息を知らせていなかったにも関わらずである。古い書簡をめくっていくと、言葉にできないほど悲しい気分になっていった。青春時代の友人達と過ごした楽しい夕べや、かつてギターに合わせて歌った歌がよみがえってくるのだった。「当時互いに飲み交わしたボンチ酒をまだ味わっている」<sup>(21)</sup>ような気がしたと、1842年12月、ヴィンゼンで遊び友達だったに違いない薬剤師のトラップに書いている。

1843年、こうした気分は頂点に達した。何年もの間ずっと彼はワイマルという牢獄から脱出する計画を立てていた。だがそれもうまくいかず苦しんでいた。彼はこのワイマルで、檻の格子の後ろか



ら自由に憧れを抱いて徐々に元気を失っていく珍しい動物のようだった。面倒な訪問者がやって来てこの動物を凝視したり馬鹿にしたし、あるいは肩をすくめてそのまま通り過ぎて行った。彼は過去の聖遺物と見なされるのにうんざりだった。聖遺物たる彼は、ゲーテの家を見学するついでに見ておかなければならないものと思われていたのだ。彼は『対話』を通じて世間が有名と呼ぶものになった。だが世間が好奇心の公衆便所と見なすものにもなったのだ。彼はそれが怖かった。だから再び人目のつかない所に引っ込んで、湯治場を訪れた後はいつも欲したような、取るに足りない暮らしがしたかった。1843年、決然と一步を踏み出す瞬間が訪れたかに思われた。プロイセン王から気前よく、故郷へ引っ込むためのお金をもらったのだ。彼は皇太子の教師として、最後にはゾフィー皇太子妃の教師として、さらに大公妃の司書として14年間も奉仕したのだから、300ターラーの年金をもらっても誰も反対しないだろう。ソレも1000ターラーをもらって、とくに官職を退いていた。300ターラーあれば親類の所とかどこか低地ドイツの田舎でなら暮らしていけるし、義兄の援助があれば息子の教育に良い環境も手に入れることができる。自分はいつかワイマルで一人見捨てられ死んでしまうに違いない、子供も僅かな財産も他人の好き勝手にされてしまうだろう、そんな不安に怯える必要もなくなるのだ。1843年9月30日、彼は別れの訪問を告げる手紙<sup>(22)</sup>を書き、それを教え子の皇太子に宛てた。感動的な言葉でこう説明した。ワイマルに滞在した目的はあらゆる点で満たされましたが、私はこの地で「可哀そうな日の当たらない生活」をしてきて、「大公妃に本を一冊差し出すために、一二週間ごとに招聘される以外」、50歳になっても出世できませんでした。そのことは本当に「情けなく」思っています。仕事をするための才能も素質も私にはありませんでした。「大して意味のない職務にも天職と満足感を見出せる」人だとか、もともと裕福な人が廷臣となるのですね、と彼は書いた。こうして彼は帰郷する許可を求め、おそらく長くない生涯のために年金として300ターラーを施してほしいとお願いした。田舎にいればそれでなんとかやり繰りできますが、このワイマルいれば心配事も出てきたりしますし借金しかねません。私には「まったく才能もありませんし、教育も受けていません。また、これまでよりも高い俸給を要求できるよう、宮廷の間人間関係の中で這い上がっていく如才なさもありません」。彼は「心から愛する」皇太子に執拗に、この切なる願いを母君に取り次いでもらい、かつての担当教師が「果てしない人生の幸福」を築けるよう助けてほしいと頼んだ。

エッカーマンの切なる願いは叶えられなかった。皇太子自身がこれに「全力で」抵抗したのだ。皇太子はかつて教えを受けた教師を失いたくなかったし、静かに晩年を過ごすという幸せを与えたくはなかった。エッカーマンにはともかく従来通りの所に留まってほしい、もしそうしてもらえなければ年金は諦めてもらわなければならない！ワイマルが文学的・芸術的な新時代を迎えられるようカール・アレクサンダーは計画していただけに、どうしてもエッカーマンなしでやっていきたくなかったのだ。

エッカーマンは自分の申し出が断られるという判断に不服を申し出ることなく、それどころかその手伝いをするつもりでいた。というのも、ともかく彼には達成できたことが一つあったからである。つまり、来年は比較的長い休暇を取ってよいということになったのだ。彼はその休暇を好き勝手に故郷で過ごしてよいのだ。

### 30. ワイマル、詩神ミューズの未亡人の住む町

ゲーテが死んでから三週間後、エッカーマンの友人ソレがゲーテ協会の設立を計画した。ゲーテ協会が目指すものは一般的な意味での文学・科学・芸術の促進で、ゲーテがその生涯に成し遂げた仕事を一つのシンボルとし、ワイマルをドイツ文化の焦点とした。ソレの考えではゲーテが指導者という立ち位置で、また、次の点は譲れなかった。ゲーテの王位を継ぐ者を期待してならない。最後の古典作家たるゲーテのために、長きに渡って古株達が結束を固めてきたが、そういった人達の威厳ある集まりが由緒ある伝統の番人となって、この新しい組織の基盤となるべきである。だがこの集まりはドイツにいる全てのゲーテ愛好者のために広がっていくべきであり、若い才能の育成にその主要課題を見出すべきである、と。ソレと大公妃は優れた才能の持ち主に僅かばかり賞金を出すことも考えていた。そうすることで若い力をワイマルに引き寄せ、おそらくは彼らを育成しようとさえした。また新しく創刊される雑誌もこの目的に貢献することになっていた。だがソレ発案の「若い才能を鼓舞するためのゲーテ愛好者協会」は、すでにその最初の段階において問題を抱えていた。この協会は「ゲーテ・アカデミー」と陰口をたたかれていたが、ソレとエッカーマンも手伝った『芸術と古代』の最終号以外、何の成果も生み出さなかった。裕福な宮廷にも、こういった種類の勝手気ままな計画を実現するための財源がなかったのだ。ベルリン出身のファルンハーゲン・フォン・エンゼも、この計画に関して専門家としての意見を述べねばならなかった。彼はなんとあの有名なラヘル夫人と一緒にワイマルへ移り住むよう強く勧められていたのだが、その提案を断っている。ソレが退職してワイマルからいなくなれば、個人的なイニシアチブが発揮できないからである。

ソレによって計画されたこの協会は、社会的な中心となることも期待されていた。つまり、毎年のように聖ゲーテの家 (Casa santa Goethe) に巡礼してくる著名人を手厚くもてなすための、ワイマルの精神を代表する機関となることが求められていたのだ。すでに名のある人物や重々しい推薦状を持っている者は、ワイマルで名の知れた人物に問い合わせればよかった。例えば、世慣れて愛想のよいフォン・ミュラー長官や、美術館長のフォン・ショルンにである。このフォン・ショルンという人物は、ゲーテや「クンシュトマイアー」と呼ばれたハインリヒ・マイアーがいたにも関わらず、ワイマルの芸術的営みを「ある種の墮落状態」の中に見出していた。太った上級司書のリーマーも問い合わせを受けたし、市教会の裏のヘルダーの家に住んでいた、痩せ細った宮内説教師レーアさえ問い合わせを受けることがあった。だが、未来の名声を夢見るまだ控えめな若い画家とか作家とかが、それなりの場所に行って自分を指導してくれる人物を求め、夕霧のかかる公園や人気のない通りで途方に暮れてしまい、「皇太子」や「白鳥」で飲み仲間が来てくれるのを待っている時、一体誰に頼ったらいいのだろうか？ ゲーテの家は閉鎖されていた。三階にはゲーテ最後の侍医フォーゲルが住んでいて、ボヘミアン風の自由奔放さでサロンで有名になっていたオットーリーエ・フォン・ゲーテは当てどもなく世界をほつつき歩いていた。彼女はほんのたまにだけ現れて、ワイマル社交界の静かな水面を波立たせた。ゲーテの孫のヴァルターとヴォルフは勉学に励んでいて、一方はライプツィヒで音楽を専門的に学び、もう一方はまだ学校に通っていた。宮廷顧問官で冷淡な当てこすりをするユーモア

人シュテファン・シュッツェもまだ生きていた。グロテスクな容姿をしていたシュッツェは未だに——1811年以來——『愛と友情のポケットブック』を発行していたが、ここには若い世代の作家達の処女作品があれこれと紛れ込んでいた。エッカーマンとは言えば奇妙な変わり者と見なされて、「位階によって彼の親しみやすさが奪われていた。」彼を惨めな孤独へと追いやったほとんどの人が、この善良な男を賞賛する術を十分に心得ていないだけなのだが。プロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム三世が嘆いて言ったように、そもそも「ゲーテ的なものが沢山」あっても皆が皆嬉しいわけではなかった。ゲーテという悪夢から解放されたのが分かった時、ワイマルでも人々は安堵のため息をついた、という意地悪な声も聞こえてきたほどである。エッカーマンが対話の名人として成し遂げたものは、耳の聞こえる人なら誰でもできるものとして肩をすくめて受け入れられた。彼の詩について語ることは気まずいことで、文学批評の絞首台で絞首刑に処せられた。

今やワイマルでは文学は惨めなものになっていた。この地にアウグスト・ピュルクという名の、医者の家系の若きワイマル人がいた。ジャーナリストや家庭教師をして何とか食い繋いでいたが、後にドレスデンの女優マリー・バイアーと結婚し、「妻の夫」となった人物である。彼は宮廷恋愛詩人の時代の「ロマンチックな文学」を通じてリヒャルト・ワーグナーに接近し、最初の熱狂的崇拜者の一人となった。またこの地にはフォン・ビーデンフェルト男爵もいた。男爵はブレスラウの若きハインリヒ・ラウベを養子にしようとして、ラウベ自身も多額の借金を抱えていたのでその申し出に感謝したという、途轍もない過去を持つ変わり者である。ビーデンフェルトは腕が一本しかなかったが狩猟が大好きで、狩りをしにワイマルへやって来て、この地にしばらくの間居着いてしまった。彼は小説や戯曲を書いたし、彼の雇い主であるワイマルの出版者フォークトが売り上げのために依頼してくるものはおおよそ何でも引き受けた。1845年、ベルリンの有名なフモリスト、アドルフ・グラーズブレナーがワイマルに立ち寄った時、フォークトはこの出版されたばかりの『新ライネッケ狐』の作者を祝って万歳をした。それに対してグラーズブレナーは、空腹という報酬を与えることで悪名高いフォークトが作家を生かしておくのはおそらく今回は初めてではないか、と機転の利いた返事をしている。さらに上記の作家達よりは真面目に扱わねばならないバルト海沿岸地域出身の作家アレクサンダー・フォン・ウンゲルン＝シュテルンベルクもワイマルにいた。彼は1836年にイルム川沿いに移住していた。才気に満ちた名人芸で文章や絵を描いたが——節度を弁えぬ態度で——モダンなゲーテを演じようと考えていた。彼がある程度ゲーテのような振る舞いができたのは、単に資金があったからである。

これ以外にもまだ何人か女性の文筆家がいた。例えばシャルロッテ・フォン・アーレフェルトは、童話以外にドイツ文学のことが分かっていないカール・フリードリヒ大公の相談役を務めていた。ヘルダーの孫のナターリエ・フォン・ヘルダーもいたし、ウィットに富んだアマリエ・フォン・グロースもいた。彼女は「アマリエ・ヴィンター」というペンネームで活発に小説を書いていた。名のあある芸術家の下に住みついている者は片手の指で数えられる。ゲーテ家の画家でもあった宮廷画家ヨーゼフ・シュメラ、銅版彫刻家シュヴェルトゲブルト、ルイーゼ・ザイトラー、比較的若い世代では、風景画家のフリードリヒ・ブレラー、歴史画家のベルンハルト・ネーアーがいた。

要するにゲーテ亡き後のワイマルは刈り入れの済んだ畑に似ていたのだ。収穫を終えてほとんど価値のある物は残っていなかった。ゲーテは少なくとも人生の後半に、精神的な後継者を育成することなど考えていなかった。彼の眼差しは遠くに向けられて、近くにいる人々や彼らの将来の心配などしていなかった。彼は自らの身辺整理をしていた。——その初日に自分の葬式が行われるであろう新しい時代を、次の世代に切り拓いてほしかった。1830年、ソレが若きゲルマニストのエトミュラーを推薦した時も、ゲーテはこう言って断った。「今度はあなたが若い人達の支援者となる番です。私は人生の中でかなりの時間とお金を、期待を寄せる若者の支援に使ってきました。ですが、一度も彼らの中から何かが生まれてくることはありませんでした。」<sup>(23)</sup>ゲーテがこれまで若い作家達を支援してきたのは、その人生という紙面上の、まだ気付かれていない「白いシミ」だったのだ。1831年、若き小説家カール・シュピンドラーが大公妃に推薦されたことがあった。小さなウォルター・スコットたる彼は間違いなく優れた創作能力があったが、スコットと同じように生活に苦しくなって、命取りになるほどやたらと作品を書きまくる運命にあった。その彼をワイマルへ招聘することが本気で考えられていた。ゲーテがシュピンドラーのことをどう考えているのか、ソレは探り出すよう言われていた。ゲーテはスコットの作品をいつも新しい喜びとともに読んでいた。シュピンドラーの『ユダヤ人』や『私生児』などは今日もまだ再刊されているが、そのシュピンドラーをゲーテは一行も読んだことがなかったし、ほとんど名前も知らなかった。それ故、ゲーテにとっての芸術の予言者たる72歳のマイアが専門家として意見を述べねばならなかった。結局それは散々な結果に終わり、シュピンドラーの招聘は話題にならなくなった。いつも少しばかり批判的な考え方を持つソレはこう述べている。「そのようなやり方をしているで、同じような目論見や素晴らしい計画が全部実行されないのです。」<sup>(24)</sup>

美術と文学を扱う若者の集まりがワイマルにあればエッカーマンも救われたかもしれない。どれほど彼が孤独を愛していたとしても——時々はお気溢れる楽しい社交の夕べを気に入ったことだろう。彼はそういったものに飢えていた。だからワイマルよりも大きな町、例えば魔女の大釜のようなベルリンへ逃亡するという突飛で冒険的な計画を何度も立てた。ベルリンであれば自分に相応しい若い仲間との付き合いが見つけれられると期待したのだ。生きるために強いられた単調な孤独は、時折彼の胸を締めつけた。見知らぬ人と一言も話さないことがよく何日もあった。大抵彼が話すのは時間給で家政を司る家政婦だった。母親がいなくなってしまった幼いカールも物静かな子供だった。以前はベルヴェデーレのソレの所で活発なおしゃべりの夕べもあったが、それもなくなってしまった。ソレはまたジュネーブで暮らしていた。見知らぬ人達や上流家庭の人達との付き合いは、決してエッカーマンの得意とするところではなかった。だからそのような機会があっても言葉が口の中で凍りついてしまい、どんな所でも邪魔になってしまう田舎の粗野な少年に戻ってしまうのだった。彼は家にいる方が好きで、歌い囀るカアカア鳴く仲間達と対話した。ハンヒェンの死以来、彼はずっと鳥を購入していた。鳥籠は大きなものも小さなものもあったが、書齋と居間の壁を覆っていた。だが時々外で足音がして誰かが通り過ぎて行ったり——いつも通り過ぎていくだけだった！——、向こうの隣家の窓に明かりが灯り、その窓ごしに人々が楽しげに集まって——あまりに多くの人だった！——家族の食卓を

困むような長い夕べになると、これまで押し殺してきたと思っていたものが苦汁のように喉を伝っていった。孤独は苦痛となっていた。彼は墓穴の死人みたいだったのだろうか？「私はこの寂寥にこれ以上耐えられません」と1838年4月、ファルンハーゲン・フォン・エンゼに書いている。同じ頃、彼はベルリンの作家グループにこう書いている。「もし我々がフランス人であれば、首都で落ち合うのでしょうか。しかし我々はドイツ人なので、一方はこの僻地で、もう一方はあの僻地で苦しんでいるというわけです。」この数週間のうちに彼はインマーマンの『エピゴーネン』を読んで、この作家に手紙を書いていた。彼特有の、優美で少し恩着せがましい馴れ馴れしさで一杯の手紙だった。彼は一年前にインマーマンの訪問を受けていたのだが、今度は自分が夏にライン川へ行行って、インマーマンとしばらく時を過ごすのを望んだのだ。その地で彼は当時有望視されていたフライリヒラートとも知り合いになりたかったし、ベルリンに行行って老シャミッソーとも知り合いになりたかった。シャミッソーとは間違いなく馬が合うに違いなかったからである。「大御所に会って元気をもらうために、しばらくベルリンに滞在したいという心からの願いが私にはあります」<sup>(25)</sup>と彼は4月、ファルンハーゲンに書いている。その後まもなく別のベルリン人、つまり青年ドイツ派の作家テオドーア・ムントが彼を訪問した時、この計画は徹底的に検討された。ただ本気でそれを考えることはできなかった——翼が切り落とされていたのだ！そう、その大都市には溢れかえるような生活がある——でも誰が行けるというのだろうか！ワイマルにいるのは取るに足らない人間で、そういった人間の集まりは魅力的に映らなかった。でも実際に皇太子の計画がこの地での新しい生活を呼び起こすのであれば、エッカーマン以上に喜ぶ者はいないだろう。

ワイマルにはすでに一つの施設があり、そこからまず初めに新しい文学的・芸術的な全盛期が始まることが期待されていた。その施設とは宮廷劇場のことである。それは居城の社交にとってなくてはならないものだった。宮廷劇場は古い名誉で食いつないでいて、侍従長フォン・シュピーゲルの働きもあって、他の宮廷舞台ほどひどくはなかった。古典作家を上演しすぎることもなかったし、彼の大好きな作家はむしろ屈辱で弱々しいヤンプスの悲劇作家エルンスト・ラウパッハだった。ラウパッハは個人的にもよくワイマルに立ち寄っていたが、この地に移住しようとは全く考えなかった。宮廷劇場のレパートリーはいつもお決まりのものだった。青年ドイツ派の劇作が1839年から描いてきたのは、若々しくも多くの場合嵐のような人生であったが、この劇場支配人はそういった作品に不安を抱いて決して舞台上演させなかった。つまりカール・グツコー、ローベルト・プルッツ、グスタフ・フライターク、ハインリヒ・ラウベの作品である。一方、ワイマル出身のアレクサンダー・ローストやその他の作家の作品はかなり早くからこの地で上演された。フリードリヒ・ヘッベルの作品上演はようやく1852年になってからのことである。劇場の支援は大公妃お気に入りのアイデアで、若い俳優の養成に資金が投入されていた。というのもアンサンブルがすでに時代遅れになっていたからである。ゲーテの教え子達は劇場支配人とともに年老いていった。支配人は年金生活に入り、教え子達は死んでいった。カール・ラロッシュのような並外れた才能を引き留めることもできなかった。演劇はオペラの影に隠れてしまった。ワイマル劇場はもはや指導的な地位を保てなくなった。もしそれを取り戻そうとするなら、自らの文学的意味を演劇の実践に結びつけることのできる人物を芸術顧問に招聘し



なければならなかった。ドイツはそのような人物を必要としていた。すると 1837 年の秋、保養旅行のためにワイマルにやって来た男がいた。カール・インマーマンである。

インマーマンは当時の演劇界の王であったが、行く場所がなかった。彼のデュッセルドルフの模範舞台は春に財政破綻して、ある馬鹿げた田舎の聴衆との戦いにも破れ、場所を変えたいと切に願っていた。デュッセルドルフから立ち去りたかったのだ。いずれにしても、彼のイルム川への旅は物言わぬ希望がないわけではなかった。ただ一般市民も新聞雑誌もその旅行について別の解釈をしていた。

居城での第一印象は気まずいものだった。他の全ての旅行者と同じように「地方司法官氏」は迎え入れられた。「ワイマルは初めてですか？ どれくらい滞在されるのですか？」など質問が交わされた。というのも出版されたばかりの『エピゴーネン』さえ読まれていなかったからである。上品ぶった口数の少なさの背後には、ばつの悪さが隠されていた。「保養」中に何名かのジャーナリストに会ったが、同じような扱いを受けた。インマーマンはこの地を出ようとしていたが、少なくともフォン・ミュラー長官に会い、長官とリーマーに招かれた。地元の名士も招待され、大公のベルヴェデーレ城でインマーマンはフリヒルトの詩を朗読した。例えば「ライオン騎行」やその他の強烈な印象を与える詩である。劇場からは音沙汰がなかった。1838 年秋にワイマル二度目の滞在となった。長官の所でお世話になり、またもやフリヒルトの詩を朗読した。今回はシェクスピアも朗読した。大公妃はティーフルトに泊まるよう誘いさえした。彼は親しくなった友人達に対して正直に、嫌々チューリングンに来たわけではありませんし、少なくともここには文学的空氣が吹いています、と述べている。それは嬉しい言葉だった。ワイマル住民であればそれを聞いて悪い気はしない。だが誰も宮廷劇場のことは口にしなかった。インマーマンはプロイセンの役人だったのだ。だからもし宮廷劇場の話になれば、彼に安定した生活基盤を用意しなくてはならず、そのことが劇場予算に負担をかけることになってしまう。いずれにしても俳優達は「通りすがりの男」にほとんど関心を示さなかった。厚かましく自分を売り込むのは、この名のある舞台監督には思いつきもしないことだった。一方で彼は、「古典的なレパートリー、すでに確立された伝統と規程を兼ね備えた完全な設備の整った劇場を、僅かな費用を払って買収したいと思う」人物が 36 人いるドイツの王侯の中に一人もいないことに腹を立てていた。「あの人達は一方で大金をはたいて至る所に粗悪な劇場を建てている！」と言って。— 1839 年 10 月、彼のワイマル滞在は三回目となった。「保養」中の『ミュンヒハウゼン』の作者とその若妻のために祝宴が催された。だが任用については何も公表されなかったし、1840 年、彼が突然亡くなったことで、ワイマル宮廷劇場の候補者リストからその名は完全に消えた。

1837 年、若い世代の典型的な代表者カール・グツコーもワイマルを訪れた。その後すぐに「ワイマルに移住する気はありませんか？」という質問の書かれた手紙が家に投げ込まれた。そのような質問をするのは、むろんあのフォン・ビーデンフェルト男爵しかいないが、いずれにしる彼の背後には出版者フォークトが潜んでいた。彼は「青年ドイツ派」の代表誌であるグツコーの『テレグラフ』を、中部ドイツの文学を勢いづけるために引き継ぎたいと考えていたのだ。これに対してグツコーは、あなた方はどこにいるのですか、と言って懐疑的な視線を向けている。私の『テレグラフ』はハンブルクで大切に扱われています。もしあなたが私のことをぜひ欲しいのであれば、安定した生活基盤をお

与え下さい。——劇場ですよ！ それに対する返答はこうだった。称号が必要でしょうね。「称号——称号——称号のことなど誰が考えていたでしょう？」とグツコーは答えている。彼にとって重要なのは勤め口なのだ。評判の良くなかった『疑い深い女ヴァリー』の作者であったグツコーには、当然のことながらワイマルでは場違いだったし、劇作家としても未知数だった。また彼自身、宮廷との付き合いは自身の「民主主義的な名声」を傷つけることもありうると考えた。だが1839年の秋、彼はワイマルに現れた。これが二度目のことだったが、今回の彼は劇作家として成功を収めていて、役者達に『リチャード・サヴェージ』を朗読した。宮廷劇場や国立劇場がドラマトゥルクとしても活躍する若き詩人達を味方に付けていた40年代には、彼の名前はしばしばワイマルとの関連で挙げられた。しかしながら演劇の再編成はワイマルではそれほど急ぎのことではなかった。フォン・シュピーゲル氏は1847年まで劇場支配人を務め、侍従フォン・ツィーゲザールが後任となった。ようやく1857年になってフランツ・ディンゲルシュテットが宮廷劇場のトップとなった。

ディンゲルシュテットはヘッセン出身の生意気な上級教師で、後にハイネは彼のことを「進歩という長い足を持つ」世界主義的な「夜警」<sup>(26)</sup>と名付けたのだが、30年代には何度もワイマルに足を運んでいた。シュテファン・シュッツェやその他の「名の知れた」文士達と親しくなって、1839年には当地で「復活祭前夜」<sup>(27)</sup>を楽しく過ごしている。そのことは彼の『ヴァンダーブーフ放浪記』に記されている。またイルム河畔のアテネと呼ばれるワイマルを、死者を悼む理由のあるドイツのニオベと賛美した。

あの時代を生きたほんの数人だけがまだ

あそこにまっすぐ立っている。歳のせいでも髪も白くなって。

風で運ばれてきた砂から、まるでピラミッドが聳え立っているかのようだ。

この地にはかつて別の時間が流れていたと

通行人に言うために。<sup>(28)</sup>

この詩に対して、若い世代は古い世代への怒りや軽蔑に身を震わせた。若者はどうしても分別がないものだし、少なくとも遠くまで広がっていくゲーテの影によって、自分達の成長が阻まれていると感じていたのだ。ただここで若者には畏敬の念が欠けているというステレオタイプを非難してばかりはいられない。世代間抗争はこんにちではずっと毒々しい花をつけるものなのだ。『ミュンヒハウゼン』を書いたインマーマンも成果を出せないことに生涯悩み続けた。だが彼は不可能なことを欲する年頃を克服して、自分の力の限界を知っていった。彼の最初のワイマルの印象を反映した『フランケン紀行』では、自分よりも若い世代に対して、どうすれば過去を敬いつつ正当に評価して自分の価値意識と一体化させられるのか、その優れた模範例を示している。その後まもなくワイマルに関する彼の言葉を引き継いだのは、比較的若い世代の、ある一人の人物だった。その人物は、あまりに突然この世を去っていたインマーマンに感動的な挽歌を歌った。

一人の英雄でさえも敬虔な気持ちになって  
英雄達の墓に自分の旅の杖を立てかけた。  
一人の真面目な巡礼者も頭を下げて  
棺が並んでいる方に<sup>へりくだ</sup>遜って歩み寄った。  
その巡礼者は墓所の花輪が埃と一体になっているのを見て  
不滅のものが存在するという考えに勇気もらった。<sup>(29)</sup>

この詩を書いたのはフェルディナント・フライリヒラートだった。数年前からこの名前は西部ドイツ文学上に輝く深紅色の彗星のようだった。1838年4月に『詩集』を出したエッカーマンはフライリヒラートにも手紙を書いたのだが、それはフライリヒラート曰く、「感心するような手紙だが、かといって何の内容もなく、衷心からのものでありつつ、時折、支離滅裂な手紙」<sup>(30)</sup> だった。「取るに足らぬゲーテの対話者」<sup>(31)</sup> の意味を理解するにはまだゲーテのことを知らなすぎる、青二才特有の横柄な感じがこの言葉には少し感じられる。またハイネの意地の悪いタンホイザーの詩には次のようにある。

詩神ミューズの未亡人の町ワイマルで  
沢山の嘆きの声を聞きました。  
嘆き悲しんで叫ぶのです、ゲーテは死んだ  
だがエッカーマンはまだ生きている、と。<sup>(32)</sup>

この詩は身を守る術のないエッカーマンにしつこくつきまとい、ジャーナリストや素人の陳腐な冗談のネタにされてしまった。だが二年後、フライリヒラートはワイマルにいる友人達を訪れて、「取るに足らぬゲーテの対話者」の第一位になるのである。フライリヒラートは1838年の最初の詩集で、ほとんど前例のないほどの成功を収めて仕事をやめ、自由な詩人生活に踏み出していたところだった。1840/41年の冬を彼はワイマルで過ごし、熱心に自分の面倒を見てくれたフォン・ミュラー長官と親しく交際した。また彼は宮廷で紹介され、彼の詩に皆夢中になった。1840年12月、皇太子がエッカーマンの所にやって来て、フライリヒラートをワイマルに留めておきたいというたつての希望を述べた。これは悪くない話ではないか。というのも、この若き詩人は結婚したがっていたのだ。彼が選んだ女性はワイマルの女性イーダ・メロスだった。彼女はメロス教授の娘で、エッカーマンはかつて教授の寄宿舎で授業をしていた。彼の目の前で、彼女はゲーテの孫達の幼友達として成長していた。ライン河畔の町ウンケルで彼女は花婿と知り合っていた。フライリヒラートはグツコーと同じことを考え、こう述べている。私に勤め口をお与え下さい、そうすれば喜んで留まります！ だが宮廷の金庫にはそのお金がなかった。結局1841年に彼は結婚し、ダルムシュタットに居を定めた。活動的なフォン・ミュラー長官と連絡を取り合っていたが、1842年2月、長官は素晴らしいアイデアを思い付いた。翻訳者グリースの死によって、プロイセン王がこの人物に支払っていた年間給与に空きができたのだ。

長官は早速フンボルトに手紙を書いて、フライリヒラートに300ターラーを与えてほしいと頼んだ。一ヶ月後、この詩人夫妻は今後の人生の心配事から解放されたわけで、本来であればこのプロイセンのお金でワイマルへ来ることができた。だが、とっくに有名になっていたこの詩人のために、何かもっと別のものをこの地に用意しておかねばならなかった！ 1842年11月、この詩人が次のような提案を受けたことで、思わずエッカーマンは喜んでしまった。つまり、文学的な集まりをもう一度自分の周りに作りたいたいと思っていた皇太子が、この目的のためにゲーテの家の管理責任者としてフライリヒラートをワイマルへ招聘したいと言い出したのだ。エッカーマンの方が適任ではないだろうか？ フライリヒラートもそう思っていた。だがエッカーマンとは言えば、年々惨めになっていったにも関わらず、これに関与したくはなかった。再びこの地に縛られたくなかったし、故郷に帰りたかった。だからフライリヒラートの任用にとても乗り気になって尽力した。だがそこから何も生まれなかった。ゲーテの家の将来は不明確だし、おそらく売却されるのだ。フライリヒラートは様子を見た。

彼の友人の一人で、ヴェストファーレン出身のレヴィン・シュッキングであれば、彼を追ってイルム川の岸辺を辿って来るだろう。彼はグツコーにそれをどう思うか尋ねると、グツコーは思いとどまるよう執拗に忠告した。「ワイマルは人間のための場所ではありません。ミイラのための場所と言ってもいいでしょう。ワイマルでは宮廷とのあからさまなコネがなければ、そして、それはもはや得られないものなのですが、この開かれた田舎町では全てが小さくみずぼらしく退屈に進んでいくので、生きていくことなどできません。疲れた放浪者をワイマルで休ませてあげましょう！ あなたとフライリヒラートには、酒場や市庁舎地下レストランしかない小都市などあり得ません。飲んだグラスワインの数が翌朝どんどん広まっていく小都市などあり得ないでしょう。ピーデンフェルトやA.ブリュックのような、四五人のあまり価値のない人達（いい人達だが悪い演奏家だ）があなたの後をつけ回して一つの領域へ引っ張って行くでしょうが、あなたがワイマルでどんな擬似的なゲーテ的地位を得られたにしても、その領域があなたを駄目にしてしまうでしょう。ワイマルは全くもって一つの巢なのです。」<sup>(33)</sup> レヴィン自身も擬似的なゲーテ的地位を欲しておらず、フライリヒラートが言ったように「幽霊を見るような疑わしい眼差し」を向けていたので、このワイマルに対する警告に納得できた。だから彼はライン河畔に行き、それから南ドイツへ向かったのだ。

皇太子が自分の周りに新しい文学な集まりを作ろうとしている、そういった話をフライリヒラートもワイマルの内外で耳にしていた。それはすでに新聞や雑誌にも載っていた。その主導権は母から息子に移っていた。大公カール・フリードリヒはその善意と施しによって国民に愛されていたが、その父親であるカール・アウグストの計画的な創造精神から何一つ学んでいなかった。つまり文学や芸術はカール・フリードリヒにとって驚くほど奇異なものでしかなかったのだ。その孫がこの溝を再び埋め合わせるために呼び出されたのかもしれない。早くからこの孫を文学に熱中させ、偉大な過去に対する畏敬の念を植え付けたのは、その教師を務めたエッカーマンだった。だが現在のワイマルはつまらない場所となっていた。宮廷生活の型にはまった単調さの中で、若くて変化を楽しんでいたこの孫も、エッカーマンと同じように感じていたのかもしれない。エッカーマンは1842年にファルンハーゲンに次のように書いている。「我々はワイマルで日増しに精神的に貧しくなっています。」<sup>(34)</sup> 1842

年 10 月 8 日、24 歳のカール・アレクサンダーは、その名がゲーテ研究の歴史と分かち難く結びついているオランダの王女ゾフィーと結婚した。新しい宮廷の細胞は自立的な生命によって自分自身を形成していった。すでに 12 月には、「並外れた尽力」のおかげで、当時全ドイツを熱狂させていたフランツ・リストを宮廷楽団長として獲得した。また、もっと沢山の関連人材を受け入れさえした。新しいメディチ家の時代がワイマルで始まるかもしれない！ だが新しいタッソーはまだ欠けていた——依然としてレオノーレには不自由していなかったが。

本稿は H. H. Houben: Goethes Eckermann. Die Lebensgeschichte eines bescheidenen Menschen. Berlin/Wien/Leipzig (Paul Zsolnay) 1934 の第 25 章から第 30 章までを訳出したものである。第 24 章までは以下を参照のこと。

林久博：「翻訳：H. H. フーベン 『ゲーテのエッカーマン——ある控え目な人間の伝記』(6)」、『教養教育研究論集』第 3 巻第 1 号、中京大学教養教育研究院、2022 年、43～55 頁。

原注：

次を参照のこと。フレデリック・ソレ：『ゲーテと過ごした 10 年——ワイマル古典主義時代の思い出 1822-32 年』ソレの自筆文書・日記・往復書簡を H. H. フーベンによって初編集・翻訳・解説、39 枚の挿絵と複写入り、ライブツィヒ、F. A. ブロックハウス、1929 年。

注

- (1) Tewes, Friedrich (Hrsg.): Aus Goethes Lebenskreise. J. P. Eckermanns Nachlaß. 1. Band. Berlin (Goerg Reimer) 1905, S. 272. [Nachtrag zu Goethes Testament]
- (2) Goethe: Faust. In: Werke. Hamburger Ausgabe in 14 Bänden. Hrsg. von Erich Trunz. Band 3. München (C. H. Beck) 1996, S. 348. [V. 11583f.]
- (3) Houben, Heinrich Hubert: J. P. Eckermann. Sein Leben für Goethe. Nach seinen neu aufgefundenen Tagebüchern und Briefen dargestellt. Teil 2. Hildesheim (H. A. Gerstenberg) 1975, S. 260. [Eckermann an Cotta (26. 2. 1841)]
- (4) Vgl. a. a. O., S. 271f.
- (5) Ebd., S. 266. [Emil Dubois-Reymond an Eduard Hallmann (15. 9. 1839)]
- (6) Ebd., S. 280. [Eckermann an Brockhaus (27. 12. 1838)]
- (7) Ebd.
- (8) Eckermann, Johann Peter: Gespräche mit Goethe in den letzten Jahren seines Lebens 1823-1832. Berlin (Deutscher Klassiker Verlag) 2011, S. 633.
- (9) Nestroy, Johann: Freiheit in Krähwinkel. Hrsg. von Jürgen Hein. Stuttgart (Reclam) 1969, S. 42. [2. Akt, 7. Szene]
- (10) 『新約聖書』「マタイによる福音書」第 25 章第 32 節、『聖書』新共同訳、旧約聖書続編つき、日本聖書協会、1991 年、(新) 50 頁。
- (11) Houben, a. a. O., S. 359. [Eckermann an Humboldt (23. 6. 1843)]



- (12) Ebd., S. 360.
- (13) Ebd., S. 362. [Humboldt an Eckermann (18. 7. 1843)]
- (14) Tewes, a. a. O., S. 254.
- (15) Ebd., S. 84. [Eckermann an Johanne Bertram (28. 6. 1828)]
- (16) Eckermann, Johann Peter: Gedichte. Leipzig (Brockhaus) 1838, S. 278.  
[[https://books.google.de/books?id=KfcKAQAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](https://books.google.de/books?id=KfcKAQAAIAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false)]
- (17) Ebd., S. 289f.
- (18) Tewes, a. a. O., S. 213. [Eckermann an die Königin (8. 4. 1838)]
- (19) Ebd., S. 215f. [Eckermann an die Königin (20. 10. 1838)]
- (20) Goethe: Faust. S. 347. [V. 11539]
- (21) Houben, a. a. O., S. 384. [Eckermann an Trapp (28. 12. 1842)]
- (22) Ebd., S. 386ff. [Eckermann an den Erbgroßherzog Karl Alexander (30. 9. 1843)]
- (23) Soret, Frédéric: Zehn Jahre bei Goethe. Erinnerungen an Weimars klassische Zeit 1822-1832. Heildesheim / Zürich / New York (Goerg Olms) 1991, S. 451. [Sorets Erinnerungen (21. 8. 1830)]
- (24) Ebd., S. 518. [Sorets Erinnerungen (10. 3. 1831)]
- (25) Houben, a. a. O., S. 270. [Eckermann an Varnhagen von Ense (3. 4. 1842)]
- (26) Heine: Neue Gedichte. Hamburg (Hoffmann und Campe) 1844, S. 234. (Bei des Nachtwächters Ankunft zu Paris)  
[[https://de.wikisource.org/wiki/Bei\\_des\\_Nachtw%C3%A4chters\\_Ankunft\\_zu\\_Paris#/media/Datei:Neue\\_Gedichte\\_\(Heine\)\\_234.gif](https://de.wikisource.org/wiki/Bei_des_Nachtw%C3%A4chters_Ankunft_zu_Paris#/media/Datei:Neue_Gedichte_(Heine)_234.gif)]
- (27) Dingelstedt, Franz: Wanderbuch. Leipzig (Wilhelm Einhorn) 1839, S. 276.  
[[https://books.google.co.jp/books?id=z8X7xAEACAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs\\_ge\\_summary\\_r&cad=0#v=onepage&q&f=false](https://books.google.co.jp/books?id=z8X7xAEACAAJ&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbs_ge_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false)]
- (28) Ebd., S. 278.
- (29) Freiligrath, Ferdinand: Ein Glaubenskenntniß. Mainz (Viktor von Zabern) 1844, S. 15. (Zu Immermanns Gedächtniß)  
[<https://haab-digital.klassik-stiftung.de/viewer/image/1169716989/18/#topDocAnchor>]
- (30) Houben, a. a. O., S. 414. [Freiligrath an einen Freund (24. 4. 1838)]
- (31) Ebd.
- (32) Heine, a. a. O., S. 126. (Der Tannhäuser)  
[[https://de.wikisource.org/w/index.php?title=Der\\_Tannh%C3%A4user&action=edit&image=/wiki/Neue\\_Gedichte\\_\(Heine\)\\_126.gif](https://de.wikisource.org/w/index.php?title=Der_Tannh%C3%A4user&action=edit&image=/wiki/Neue_Gedichte_(Heine)_126.gif)]
- (33) Houben, a. a. O., S. 418. [Gutzkow an Levin Schücking (13. 11. 1840)]
- (34) Ebd., S. 270. [Eckermann an Varnhagen von Ense (3. 4. 1842)]